今回の企画展示について

小栗虫太郎（おぐりむしたろう）（明治34年ー昭和21年）は、昭和8年（1933）にデビューするや、探偵小説新潮流の旗手と目され、専門誌大衆誌のみならず「中央公論」「改造」などの総合誌でも活躍したミステリー作家です。巷間「三大奇書」などと称される衒学（げんがく）の大伽藍『黒死館殺人事件』が飛び抜けて著名の作ですが、犯罪心理を克明にたどる怪異小説や、波瀾万丈の伝奇小説、緊迫した国際情勢のもとで書かれた秘境冒険小説など、多彩に構築された文学世界は、まさに〝pandemonium（大魔城）〟と名付けても過言ではないでしょう。

平成28年（2016）夏、この小栗虫太郎の草稿類を含む関係資料が古書入札会に出品されて話題を呼びましたが、成蹊大学図書館が落札、購入しました。このことは資料の散逸劣化を危惧していた多方面から歓迎されましたが、ことに小栗虫太郎のご遺族の皆様にたいへん喜んでいただき、同年暮れには本学訪問の上、それぞれのもとに遺されていた資料のご寄贈を賜りました。この時、デビュー作『完全犯罪』の不揃いだった清書原稿が、少なくとも30年、あるいはその倍以上の時を隔てて完全に揃うという〝事件〟もあったのです。

『完全犯罪』の他にも、新収蔵資料には多くの草稿やメモがあり、小栗虫太郎の創作過程や作家像の解明が期待されます。きちんとした分類整理はしばらく先となりましょうし、私たちの研究の蓄積も十分とは言えません。しかしだからこそ、そのための一歩を踏み出したいという思いで、今回の小栗虫太郎展となりました。「扉を開く」としたゆえんです。どのように足を踏み入れ、どのように進むべきか。ご理解ご賛同とともに、ご助言を賜れば幸いです。

監修／成蹊大学文学部 教授　浜田 雄介